

にては自分の日常と、あちこちに分離してござらん。

そして、その分離をうのむたのには、どうしても運動の  
へ非・日常性の質／＼を問題としなければならぬ。そのような  
意味で、詩の非日常性の質が問題となる。

# 4 日常と非常

そのことが⑧の“大衆との關係”を言うときの、ぼくの問題意識である。そこで、ぼくの詩や運動のそれを、質をしていざりとして、“大衆一に向一詩の其効者”である読み手、き、どうしても見出さねばならなくなる。(一月25日)

〔1〕 ところで、すこぶる戸田引水的よみ方で著者には苦笑をかう以外にならないが) 以下は池田浩士さんの「大衆小説の世界と『反世界』」(現代書館) をもんでいて、傍線をひいた部分の一節である。(実は何日もかかってようやくので線をひいたり、びがなかつた

り殆んどひがなかつたのだが、この著書の内容は前人未踏といつて誰もが讃嘆していなし領域を新しくオリジナルとしか云ふべからず視点から見てゐるに一権権はた案堆ハシナカまつていて、線をひき合せば全部ひがむばかりめほど、一節一節がこゝの宝庫だつた。ぼくが日頃ぼくやり考えたりするとの感想をくらうな部分をもふくめて、それこそ刮目する

▼ 創期的に新しい表現が支配権を獲得するためには、それを自己のものとして受け入れる受容者が、かなり普遍的に見る意味でも、一どよんではじと心から

表現しきれないものを表現しようよ、うな、劃期的に新しい方法が生れではじめて、それを受け入れる新しい感性をもつ受容者を形成されるのである。(山見)

▼ 読者の参加をやまざまなかたちで実現しようとする試みは、太田ト説の發展と不可分のものだつた。

▼ ル・ボルタージュや実録小説という形式が生れたのも、これまた大衆小説の分野の中でのことだつた。(19夏)  
▼ 受け手の参加と実録ものという二つの試みは、大衆小説のもつとも基本的な特徴であり、大衆小説を作品や作

者の側面から見るととも、また受け手である読者を複数に  
おもなめながら大衆小説を立ちとどけるも、もつとも重要な道  
しるべとなる要素である。(19頁)

者の現実世界と拮抗しそれを凌駕しうる世界、現実世界と少々とも等価な世界となつてゐかといえば、…もづく作者の立場から、読者におけるぼす作用という面からだけ述べてしごることだけでは、とうてい尽くされぬものではない。

むしろ、作者によつて魅惑され説教されることはなし  
讀者の側の苦為、聲せしめられ盲せしめられ、幻惑せしめ  
られるだけではない苦為が、そこには存在しうるのではないか

るましか（2頁）  
▼このようなとき、さしまざまなかにちでの読者参加の試みや、実録もみみなかに反映された事実への関心は、もつ

とも遠い時間や空間の彼方で演じられるモノと空想じみた出来事とも、ほかならぬ自分自身のいまとここにかかるる表現として、読者のこころに結びつけ、そして読者の「こう」を他の読者と結びつける。受動的にすぎないかに見え、孤立した個人でしかなじようにみえる受容者が、そのとき、能動性と共同性を獲得するのだ。<sup>ヘ22頁</sup>

⑫ 「既成の運動觀からとび出して、運動

「いわゆる詩的概念のワクの外に出で、いかば通俗的？非詩的世界から、改めてへ詩とは何か」と創つていく」ということは、「非日常的世界から日常的世界へと戻る」。その上でさらに「聞く所した境界ともいうべき絶壁を穿つて、改めて、非日常的世界へとはしつていぐ」ということである。

、二つの世界の往還を自在・自由にする途とひらべと  
いうこと、あるくは、へ・非日常の日常へ・日常の非日常  
へ・といつてもよい。  
もちろんこの場合の・へ・へ・したへ・日常・あるいは  
へ・非日常・は、もう当初のままのものではない。そのへ

往還くは、ヤシナリハ、田舎の革命化へ、革命の農化へ、意味へとすむものと云わばならぬ。

▲ さつと具体的に、『小詩集』でモウつた感想に即してか  
くつもりが、なんかりクリクリっぽくなつてきて、はて何をな

うつモリドツドリがーと行キ詰つまつド、感じ、尻切れトン  
太だが、一應こころで。で最後にー

▼ ほくの薛や運動が、じなのうなものとして、は  
つきり意識化しておいたのは、戦闘にしうとやかの年前  
女性たちと自由を組み立てる

からだ。だが、この二つは、ぼくの内部で別々にあつて  
つながりとらず、何かすきまがあった。その詩と運動が  
こんなにもぴったり、ぼくのなかで並ぶようになつたの  
は、川詩集をいたまたいたして、感想をいつぱい、いろ  
いろもらつてからである。一々れ状を出さなかつたが  
ここで心から、ありがとう、と申上げる。尚、感想集に  
無斷で、一部の抄出掲載の非礼をあえてしたことを、どう  
かお許しを。『感想集』が、現代詩の問題

を側面から照らしてみると、うなぎ感想もある。



(ばくは「自由百合」講一、ちがう、といふこと)をかいた。南連の運動論としておんでみ下す。▼詩集(保存用30冊をのこして)

田舎から大山ユキへモジヤツコトナリ. どうしてゐるか? が  
▼コメモス×切30日! 詩をかかねば! と思ふうのだが……